

## 洋14-176 (ショートコメント)

### 「ホビット 決戦のゆくえ」 ★★★

2014 (平成26) 年12月27日鑑賞<TOHOシネマズ西宮OS>

監督・製作・脚本：ピーター・ジャクソン

灰色のガンダルフ (最も力のある魔法使いのひとり) / イアン・マッケラン

ビルボ・バギンズ (ホビットの少年) / マーティン・フリーマン

トーリン・オーケンシールド (ドワーフの王子) / リチャード・アーミティッジ

タウリエル (森のエルフ、スランドゥイル王の近衛隊長の女性) / エバンジェリン・リリー

スランドゥイル (レゴラスの父) / リー・ペイス

バルド (人間、船頭) / ルーク・エバンス

スマウグ (巨大な竜) / ベネディクト・カンバーバッチ

バーリン (ドワーフ、ドゥリンの一族で高潔な戦士、年長者) / ケン・ストット

ポフル (ドワーフ、楽道家) / ジェイムズ・ネスビット

くろがね山のダイン / ビリー・コノリー

キーリ (ドワーフ、野心家) / エイダン・ターナー

フィーリ (ドワーフ、ドゥリン王族の家系) / ディーン・オゴーマン

ドワーリン (ドワーフ、闘志に燃える戦士) / グレアム・マクタビッシュ

湖の町の統領 (飢餓と恐怖で民を支配するがめつい圧制者) / スティーブン・フライ

アルフリド (湖の町の統領の狡猾な腹心) / ライアン・ゲイジ

茶のラダガスト (魔法使い、ガラドリエルらとの連絡役) / シルベスター・マッコイ

グローイン (ドワーフ、会計係) / ピーター・ハンブルトン

オイン (ドワーフ、ヒーラー (治癒者)) / ジョン・カレン

ドーリ (ドワーフ、ノーリとオーリの長兄) / マーク・ハドロウ

ノーリ (ドワーフ、3人兄弟の次男) / ジェド・プロフィー

ピフル (ドワーフ、言葉が不明瞭) / ウィリアム・キルシャー

ボンブル (ドワーフ、食事作り担当) / スティーブン・ハンター

オーリ (ドワーフ、3人兄弟の三男) / アダム・ブラウン

バイン / ジョン・ベル

アゾグ (穢れの王と呼ばれる鉛色のオーク) / マヌー・ベネット

ボルグ (アゾグの息子、オーク) / ジョン・チュイ

ガラドリエル (ロスローリエンの奥方) / ケイト・ブランシェット

老いたビルボ / イアン・ホルム

サルマン (白の会議の長を務める魔法使い) / クリストファー・リー

エルロンド卿 (裂け谷の領主、伝説の半エルフを父に持つ) / ヒューゴ・ウィーピング

レゴラス (森のエルフ、スランドゥイル王の息子) / オーランド・ブルーム

2014年・アメリカ映画・145分

配給 / ワナー・ブラザーズ映画

◆『ロード・オブ・ザ・リング』3部作のラストを飾った『ロード・オブ・ザ・リング (第3部) 一王の帰還』(04年) (『シネマルーム4』44頁参照) は、アカデミー賞史上最多11部門にノミネートされるという偉業を成し遂げたが、さて『ホビット』3部作のラストを飾る本作は？

『ロード・オブ・ザ・リング (第1部) 一旅の仲間』(02年) (『シネマルーム1』29頁参照)、『ロード・オブ・ザ・リング (第2部) 二つの塔』(03年) (『シネマルーム2』54頁参照)、『ロード・オブ・ザ・リング (第3部) 一王の帰還』について、私はそれぞれ星4つ、5つ、5つをつけたが、それは作品の壮大さを評価したため。しかし、壮大な物語もずっと続くとやはり飽きてくるもので、『ホビット』シリーズ第1作の『ホビット 思いがけない冒険』(12年) は観ていないし、第2作の『ホビット 竜に奪われた王国』(13年) も星3つだった (『シネマルーム32』未掲載)。とりわけ、『ホビット』第2作では、終わり方に違和感を覚えていた。

しかし、さすがにそれを受けた第3作たる本作の冒頭はスムーズにストーリーが引き継がれているうえ、「五者」入り乱れた大戦闘シーン終了後のストーリーのまとめ方は実にオーソドックス。それはそれでいいのだが、正直、どうでもいい感も・・・。

◆今年最大のハリウッドの話題作は何といっても『GODZILLA』(14年) (『シネマルーム33』254頁参照)。新旧比較を含めた「ゴジラ」の勇姿を見れば、本作に観る、炎を吐く黄金竜スマウグ (ベネディクト・カンバーバッチ) の迫力もつい劣って見えてしまうのでは・・・？ 『ホビット』第2作のラストに登場したスマウグはドワーフの王国エレボールを襲撃して占領し、金銀財宝の中に長い間眠っていたが、『ホビット』第2作ラストにみるビルボ (マーティン・フリーマン) たちの侵入によって目覚め、湖の町に向かったから大変。

本作最初の大スペクタクルはスマウグがその口から放つ炎によって焼き払われていく湖の町の姿だが、バルド (ルーク・エバンス) が放った鉄矢によって、このスマウグも・・・。

◆他方、湖の町を襲うスマウグとバルドとの死闘を「われ関せず」とばかりに、金銀財宝の中でご満悦なのが、ビルボの親友トーリン・オーケンシールド (リチャード・アーミティッジ)。トーリンはドゥリンの一族の王で“山の下の王”の王位継承者だが、灰色のガンダルフ (イアン・マッケラン) とビルボの協力を得てエレボールへの帰還を果たし、王になると、まるで人が変わったように・・・。本作前半のストーリー展開の興味はそこにある。

NHK大河ドラマ『軍師官兵衛』では、戦いのない世を目指して天下人になった途端に、明国への進攻を主張し、淀君を溺愛し、まるで人が変わってしまった太閤秀吉の姿が興味深かったが、目標に到達してしまうと変わってしまうのは人間も、ドゥリンも同じ・・・？

◆そんな中、灰色のガンダルフが予見したとおり、「闇の勢力」が財宝を手に入れるべく軍勢を結集していたから大変だ。それが「穢れの王」とも言われる鉛色のオーク。それを率いるのはアゾグ (マヌー・ベネット) とその息子ボルグ (ジョン・チュイ) だが、ここらあたりの人物(?) 関連図は複雑で、書いてみるとキリがないので、大幅に割愛。結局①人間 (バルドたちが中心)、②エルフ (レゴラス、タウリエル、その父親スランドゥイルが中心)、③ドワーフ (トーリンやタウリエルの恋人キーリなどが中心) の連合軍とオークの大群との、はなれ山における決戦が本作最大の大スペクタクルシーンとなる。

◆そこでのポイントは、紀元1600年の「関ヶ原の合戦」において、小早川秀秋が日和見を決め込んで容易に動かなかったのと同じように、あれほどみんなの信頼を集めていたトーリンが日和見を決め込み、一人財宝の中で悦に入っていたことだが、合戦が進む中、次々と犠牲者が出始めると・・・。たしかに、本作中盤のハイライトとなる大合戦は、関ヶ原の合戦の何十倍の規模を誇るもので、『戦争と平和』におけるアウステルリッツの戦い(1805年) やポロディノの戦い(1812年) にも匹敵する大規模なものだが、さてその面白さは・・・？

◆本作における勝者は人間=エルフ=ドゥリンの連合軍であり、敗者はオークと決まっている。しかし、戦争には犠牲者がつきものだから、一人また一人と『ホビット』シリーズの有力キャラクターが死んでいくことになる。しかし、死者は一体ダレ？そして、生き残るのは・・・？そんな人間ドラマ(?) の後、スクリーン上には『ホビット』3部作最終章にふさわしいシーンを迎えるが、その予定調和的な終末の是非は？

◆本作のパンフは税込価格850円だが、第1作、第2作と同じようにボリュームが多く本作の鑑賞には不可欠だ。そこで説明されている各キャラクターの関連図を常に参照しながらストーリーを追っていかなければなかなかわからないので大変だが、この壮大な物語にハマった人もたくさんいるはず。そんな人たちは、長い間本当にご苦労様でした・・・。